10　数十に及ぶ都下実践園の様々な表情

さて、東京の実践園の紹介を始めるわけですが、まず第一番には、おそらく東京ではもっとも早く石井方式を取り入れたと思われる足立区の梅島幼稚園をあげることにしましょう。

東武線の梅島駅から歩いて 5 分ほどの、下町の一角に梅島幼稚園はあります。園児数 120 名弱。創立は昭和 27 年。石井方式は 44 年の 10 月から採用しています。といっても、当初は、下駄箱の名札をかなから漢字に変えたりする程度で、父兄の理解を得るためにも、急激かつ全面的な導入方法は取らなかったといいます。それでも、名札を漢字に変えたところ、それ以前の、ひらがなとマークを使って、子どもの靴を入れる場所を指定したやり方ですと、三日から一週間ほどかけないと子どもはその位置を覚えなかったのが、早い子で一日、遅くても三日で覚えたといいます。そして、これが漢字学習の効果に対して「納得できると思わせた大きな理由」と園長の山下宏一先生は語っています。

山下先生が石井方式と出会ったのは、44 年に三重県鈴鹿市で聞かれた、ある研修会の席上ということです。その時、石井先生の講演を聞き、かねてから、漠然と従来の幼児教育に対して抱いていた不満が、みごとに解消したといいます。山下先生はこのことを「幼児の可能性を解明した最新の科学、大脳生理学に理論づけられた、幼児の可能性を十分に伸ばし得る石井方式に着眼」したと表現しています。このように始められた漢字教育ですが、7、8 年の間はいわば、基礎づくりとでもいえる時期だったそうで、現在のような学習パターンになったのはそれ以降のことです。

では、現在の学習はどんなやり方で進められているのかといいますと――。

まず、漢字絵本を、一回に 2 頁ほど読み進み、慣れたら一冊まとめて読み返す。こうして同じ本を一か月間使用、このペースで年間 12 冊を間違いなく読破するそうです。

もうひとつ。これがこの梅島幼稚園の特色でもめるのですが、いわゆる“朗読”を行なっている点です。それも、日本の先人たちがつくりあげてきた「古典」とでもいうべきものをどんどん使って進めるのです。年中･年少児は、諺、格言、俳句などの朗読をします。「犬も歩けば棒に当たる」「蛙の子は蛙」「猫に小判」「山路来て何やら床しすみれ草」「やせ蛙負けるな一茶ここにあり」といった句を、子どもたちは、先生の掲げる大判のカードを見ながら、大きい声で一せいに朗読するのです。その光景はまさに壮観の一言につきます。

朝、園児が登園してくると、一つか二つの新しい句を既習の分とあわせて朗読します。この時間わずか 2、3 分。降園時に、その日に示

した新しいカードの反復を一分以内で。たったこれだけのことで、子どもたちは年間 100 の諺（5〜10 月までに）と、50 の俳句（10〜2 月まで）を完全に覚え切ってしまい、3 月には、かの有名な宮沢賢治の「雨ニモマケズ」を朗読するといいます。

年長児になると、時間配分の要領は年中・年少組と同じで、今度は百人一首を毎日一首のペースで 4 月から 9 月までひと通り朗読し、10 月ににその復習、そして 11 月からは万葉集、伊勢物語、枕草子、徒然草等の中から名文を選び、同じく朗読させるよう指導しています。

こうした漢字学習の積み重ねのなかで、いったい、子どもたちはどう変わっていくのか、どう成長するものか――山下先生はこれらについて以下のように明快に語りました。

「まず、目が輝いて生き生きとして来る。さらに、記憶、理解、判断、推理の各能力が向上し、情緒面でも一段と伸びる。また、発音がよくなり、語調、語感がわかるようになってボキャブラリーも当然増え、そうして本好きになる」というのです。

その結果、卒園生たちもまた、作文が好きになったり、国語が得意になったりして、小学校へ上がってからの学校側の評価も高いといわれるのも、納得がいくところでしょう。

山下先生はまた、近隣幼稚園への普及活動にも力を入れています。ここ 7 年くらいの間に、足立区内だけで実践園が 10 園以上に増えたことにも相当な尽力があったと思われます。

特色を競い合う各実践園

そのためか、東京都内の実践園のなかで、梅島幼稚園のある足立区は群を抜いて多くなっています。

同区佐野のいずみ幼稚園もそのひとつ。足立区 63 番目の公認幼稚園として 51 年に開園、現在 200 名以上の園児が、石井方式による漢字学習に熱心に取り組んでいます。

同じく足立区弘道にあるのぞみ幼稚園は 47 年に創立されました。この園では、石井方式と出会う前に「かな文字には意味がない、漢字には意味がある」との観点に立って、象形文字からの漢字導入を計り、新しいカリキュラムを作成して漢字を子どもたちに提示したところ、子どもたちが興味を示したためスムーズに取り組めたという経験があるそうです。ちょうどそんな時に、石井先生との出会いがあって、以後、漢字教育はより深く、広く発展することになりました。

この他、足立区内には、竹塚、カワイ、永昌院など 10 を超す実践園があります。

台東区の今戸幼稚園でも、のぞみ幼稚園と同じように、「漢字教育はすでに昭和 35 年から私の独自の方法で行なっていた」と園長の今津一雄先生は自信を持っていいます。当初から父兄の反対もなく、も

ちろん石井方式の導入とも相まって、以後、漢字学習は引き続いて行なわれ大きな成果をあげています。

そのほか、実践園が多いのは、葛飾区でしょう。なかでも、明和 13 年の創立で、卒園生がすでに七千名余りも数えるという古い歴史を持つ上平井幼稚園は、昭和 50 年に石井方式の採用に踏み切っています。理事長が石井先生の講習会に参加、その理論に感銘を受けたのが、導入のキッカケだったといいます。始めのころは父兄には、“漢字で教える”のを“漢字を教える”ことと誤解され、それを解くのに苦労したようです。また先生の方も、抵抗感のある人とない人と、その受けとめ方が分かれたために混乱しましたが、今では園をあげて取り組んでいるということです。

この上平井幼稚園の実施方法は、園のなかで生活指導に使う名詞を漢字カードにし、子どもの持ちもの、ロッカー等には全部漢字で名前を表示、その他ボール紙に漢字を書いてパズルをつくったり、漢字カルタ取り、そして漢字絵本の読み合わせ……と様々です。

子どもたちは、乗り物に乗っている時や街を歩いている時、目にふれる看板、広告、駅名など、知っている字を大きな声でいったり、わからないと大人に尋ねたり盛んに漢字に興味を示しています。なかには、お互いの名前に“木”の字が付くことを二人が発見し、そのため仲良しになった、という微笑ましいエピソードもあります。また、これは大阪・貝塚市の木島幼稚園（267 頁）での経験と似ていますが、知恵遅れの子どもたちにとって、かなよりも漢字の方が一文字で意味が取れて理解しやすいこと、つまり、パズルやカードで根気よく続けますと、漢字が読めるようになり、同時に、思考力、図形の構成力などが良くなるという変化に気づくことがあるそうです。漢字で教えることの優れた点が、みごとに表われた例といえるでしょう。

おなじ葛飾区でも、二葉幼稚園は、58 年度に採用というもっとも新しい実践園。「石井先生の原理を知り、実際の指導を見て、幼児の才能開発に効果ありと信じた」というのが園長の檜山俊郎先生が石井方式を実践した動機です。園の先生方も数回にわたり石井先生の指導を受けて、最初持っていた懸念はすっかり消え、積極的に取り組んでいるとのことです。先生方の関心が深まると同時に、子どもたちの手応えもしっかりして来て、今後の見通しは明るいものがあると檜山先生はいっています。

保育室、下駄箱、廊下など、園児の目につくところを漢字で示したり、漢字読本の文章をゲームにするため、模造紙に文章を一部漢字を空欄にして墨筆で書き出し、子どもたちにその空欄に該当する漢字を当てはめさせる方法――といろいろな工夫をしています。子どもたちの変化や反応などについて、檜山先生は「本年度が最初ですから、現段階ではその変化は、徐々に表われつつあるといったところで

して、いずれにしても、園児は興味を持って取り組んでいますので、今後の成果は必ず期待できる」と太鼓判です。これからが正念場というところでしょう。

葛飾区内では、他に明昭第一、若草など数園が実践中という状況です。

他の区内の現状をザッとみますと、それぞれ代表的な実践園としては練馬区のみのり、北区の日の基、江戸川区の松本、新宿区の自證院あやめ、墨田区の本所白百合、杉並区の梅菊の冬幼稚園があり、そして、板橋区には大東文化大学付属の青桐幼稚園があります。

この青桐幼稚園の園長は石井勲先生その人です。高島平の団地群の一角で、都立高校、養護学校、公園などに囲まれた静かな環境にあります。昭和 45 年に、幼少教育の重要性に着目し、全国の大学に先がけて設立された大東文化大学幼少教育研究所の初代所長に石井先生は就任しました。また、これにほぼ 2 年遅れて開園した青桐幼稚園の顧問としても、石井先生は様々な形で指導に当たって来ました。それから 7 年後の 54 年 5 月に、園長に就任しました。

園児故は約 300 名。石井先生は、「全国の実践園の先頭に立ち、職員一丸となって努力しています」と意欲満々。漢字絵本、フラッシュカード、漢字カルタなどはもちろん、ここでは大阪の小路幼稚園と同じく、論語、唐詩などを導入し、先進的な漢字学習が実施されています。

「漢字学習は少数の子どものための英才教育ではないし、まして子どもに無理強いをして知識を与える早期教育でもない。幼児や小学生こそ漢字を学ぶ“適時期”なんです」という石井先生の長年の持論が、そのまま研究実践され、全国から注目されている幼稚園です。

最後に都下の各市ではどういう状況にあるのか、見てみますと、意外に早くから漢字学習を実践している園のあることがわかります。たとえば、三鷹市のなおび幼稚園（大越金吾園長）は昭和 45 年から早々と石井方式を採用、西多摩郡瑞穂郡の福正寺松濤幼稚園（木下多喜子園長）も同じく 45 年からと早くからはじめています。両園とも、当初はどこの園でも経験するところの教師の不安感を克服した後は、スムーズな漢字教育が成果をあげているそうです。松濤幼稚園はまた、福生市の福生多摩幼稚園と共同歩調をとって進めているとのことです。この他、町田市の関進、町田文化幼稚園、武蔵村山市の東京多摩幼稚園、府中市の府中新町幼稚園などの代表的な実践園があって、毎日子どもたちが漢字で楽しく遊び、学習をしています。